ある部員のおだやかな一日

久振　海太

「おはよう、橙子……」

僕の一日は、いつも素敵な挨拶からスタートする。送信ボタンを押して無事に送れたことを確認すると、スマホを枕元の机に置いてゆっくりと体を起こした。

「はあああ……」

深呼吸をして朝の新鮮な空気を吸うと、窓から差し込む暖かい光が僕を迎えてくれているような気がする。

「今日も一日！」

身支度を整えると家を飛び出す。お腹も空いたので途中でコンビニに寄っていこう。そんなことを考えながら自転車に跨がり、勢いよくこぎ始める。昔からこの時間は人通りが少なかった気がする。人がいないので、交通事故の心配をせずにスピードを出せるのだ。

顔に当たる爽やかな風が気持ち良い。のびのびと自転車を漕いでいると、あっという間に目的のコンビニに到着した。

――ウィーン――

自動ドアが開くと、中から快いＢＧＭが聞こえてくる。

「……いらっしゃいませ！　この春おすすめの商品は……」

快いＢＧＭかと思ったらただの店内ＣＭか。そんなことを思いながら店内の商品を眺める。在庫が少ない。そういえば昔も、朝早く来たときは食品輸送のトラックがまだ来ていないとかで食品が少なかった気がする。

無いものはしょうがないので目の前に見えた美味しそうなクッキーを手に取る。これで良いか。原料が小麦粉だと考えれば、お好み焼きと似たようなものかもしれない。適当な飲み物も選んで店を出た。

「さて、部室、行きますか！」

コンビニでお菓子と飲み物を手に入れた僕は、まっすぐ部室に向かう。部室でゆったりくつろぎながらご飯を食べるのこそ、至上の贅沢なのだ。

サークル棟に到着し、入口のドアを開けると階段を登って三階へ向かう。三階の一番奥の部屋、それが僕の文藝部室なのである。

「誰か来ている人はいるかな……」

なんて声に出してみるが、やはり返事はない。もっとも、僕は部室で一人無為に過ごす時間の大切さを知っているし、それはそれで気を張らずのんびり出来るのだ。部室には一人で時間を潰すアイテムもたくさんある。

「とりあえず、本でも読むか」

文藝部室には、たくさんの本がある。過去の部誌なら、たぶん少なくとも五十年分くらいは有ったのではないだ

ろうか。それ以外にも、部員が持ってきた市販の漫画や小説も収蔵されている。これらの作品を読むと、作者それぞれの様々な世界を冒険出来て、とても楽しい。
　買ってきたクッキーをつまむ音と、本のページをめくる音。そんな2つの音がマリアージュして、独特の穏やかな空気を作っていた。本が汚れることを心配する声もあるかもしれないが、手を汚さないようにコンビニで割り箸も貰ってきている。もうここは僕だけの空間だ。
　ゆったりとしていると、突然バチン！　という音が窓から聞こえた。どうやら鳥が落ちてきたらしい。折角ここまで生きたのに、可哀想に……。
　お墓でも作ってあげたいところだが、死んだばかりなら感染症のウイルスを保持しているかもしれない。ヒトに染つるタイプで変異していたら危険なので、お墓を作るのは明後日くらいにしようかな。
　小説も短編を丁度読み終わったところでキリが良い。今度はゲームでもしたいところだが、少し部屋が暑くなってきたので扇風機をつけるとしよう。文藝部室には夏は扇風機、冬には電気ヒーターと冷暖房器具が備わっているので、どの季節も比較的快適に過ごせるのだ。
「もう夏か……」
　部室にはたくさんのボードゲームが用意されており、他の部員がいれば様々に遊ぶことが出来る。これらの遊びがあるのは、きっとその経験が創作の糧になるとの考えによるものだろう。ちなみに、部室にはアナログゲーム以外はファミコンのエミュレータくらいしか置かれていないが、他の部員がＳｗｉｔｃｈなどの電子ゲームを持ってきて、それで遊んだという思い出もある。
「誰かいないかな……」
　ポツリとそんな言葉を漏らしてしまったが、そんな僕は最近一人数役でゲームに興じるのにハマっている。どのゲームでもそうだが、ポイントはプレイヤーによって頭を使い分けること。保持する情報をプレイヤーごとに混同しないようにするのが大切になる。一人数役で遊びはじめた当初はある一人だけを有利に進めてしまうミスもしてしまったが、最近は上手く頭を使い分けられるようになった気がする。これぞ人間の進歩だ。
　もちろん、多重人格になろうとしているわけではない。昔、海で漂流してしまった人で、人格Ａと人格Ｂで会話をし続けることでパニックにならず助かったという例を聞いたこともある。つまり、頭の中で何人かを使い分ける能力は役にたつものなのだ。当然、創作活動にも生かせるだろう。
　というわけで、そんなトレーニングをさせてくれた文藝部は最高だ。もしも入部するか迷っている人がいたなら、間違いなくおすすめしただろう。文藝部は最高だ。
「さて、と。何で遊ぼうかな？」
　棚に積まれたボードゲームの山を見て、カタンの開拓

者をプレイすることに決める。カタンは各プレイヤーで未開拓の土地に乗り込み、そこで資源を調達しながら大街道や大都市を築くゲームであるが、資源などについてプレイヤー間で自由に交渉出来るのが面白い。そのため部員によって異なる性格が見えてくるのだ。とはいえ、今は自分一人で複数人役をしなければならないから、攻撃的な姿勢、協調的な姿勢、堅実な姿勢、詐欺師的な姿勢と四パターンのキャラに戦わせてみよう。今日は誰が勝つだろう？

◆◆◆

　気づけば部員も参戦しており、そんな四人でのプレイはやはり楽しかった。あっという間に時間が過ぎていく。残念なことにカタンでは負けてしまったが、折角四人も揃ったからＴＲＰＧでもやりたいな。文藝部室ならＴＲＰＧのルールブックやキャラクターシートも用意されているので、いつでも遊ぶことが出来る。とはいえ、今日は軽めにのびのびＴＲＰＧでも遊ぼうか。昔は土日などに集合して丸一日遊んだものだが、今日は……多分、平日だったような気がするから。

「それじゃあ、カードを配るね」

　普通のＴＲＰＧではプレイヤー以外にゲームを司るゲームマスターという役割の人が必要になるが、のびのびＴＲＰＧではカードを用いることで全員プレイヤーとして遊べるように出来ている。代わりにキャラクターが既成でキャラメイクの楽しみと自由度はやや減少してしまうが、このような時には丁度良いかもしれない。僕らはみんなでのびのびと楽しんだ。

「もう夕方だね……」

　誰かが言う。窓から外を見ると、確かに空は茜色に染まっていた。

「残念だなあ……」

　楽しい時間はあっという間だ。部室に部員が集まり、それぞれ好きなことをする。一緒に遊ぶのも良し、自由に本を読んだり、スマホやガラケーを弄るのもまた良い。今日は途中から部員も参加したので、本当に充実した一日だったように思う。もっと遅くまで部室にいたい。そうだ。

「ギリギリまで部室で過ごそうよ」

　サークル棟の閉鎖時刻。昔はそんなもの無かったのだが、あるときサークル棟で火災が起こったことを切っ掛けに、二十時で追い出されるようになってしまったのだ。そして……そして新型ウイルスによってサークル棟は閉鎖されて……。

「あれ？」

そうだ、もう、サークル棟は開放したのだ。僕がサークル棟を解放した。そして、鍵を締めに警備員の人が来ることも、もう、二度と無いのだった。

「今日は、サークル棟に泊まっていくことにしようかな」

僕の言葉が、僕しかいないこの部屋に虚しく響く。

カタンを始めたときは、一人四役しているだけだった筈なのに、気づいたら部員と四人で遊んでいる気分になっていた。

今はもう、誰もいない。どこかにその躯が落ちていたとしても、それらはみんな、ただのオブジェクト。ウイルスに侵されて、動かなくなってしまった。

ゾンビ映画で人類最後の一人になる話を見たことがあるけれど、今思えば、ゾンビのほうが羨ましい。ゾンビだったら動いてくれる。みんなが、元気に動いてくれたはずなのだ。みんなの躯に埋もれたり、触れ合うことだって出来たのに。

でも、僕は。みんなとの思い出が詰まったこの部屋で、この思い出を大切に守りたい。まだ読んでいない部員の小説だってある。最期まで、部室とともに生きたいのだ。

今日はそんなこの場所で、昔ゲームをしながら夜を越えた先輩の姿に思いを馳せながら。みんなの思い出に包まれて眠ることにしたいと思う。

「おやすみ、橙子……」

これは毎日のルーティーン。

かつて見ていた、ただの掲示板での合言葉。

挨拶を書き込んで、それに気づいたまだ見ぬ誰かが新入部員となってくれるその時を、心から願っている。